

四万十市ふるさと応援団員からの便り

幡多のこどもたちに 幡多の昔話を

高校を卒業し、中村を出て、二十年になります。今は、見渡す限り山も川もない都会で、こどもたちに昔話を語りながら暮らしています。

あたしが具同小学校に通っていたころ、学校の先生方が、『幡多のむかし話』という本をつくってくださいました。この本を読んで、昔話というものが、遠いどこかの話ではなくて、自分の暮らしている場所で、自分につながる人たちが伝えてくれたものだと知り、自分も、自分の暮らす幡多も、自分のまわりの人もだいたいすきになりました。大学で、古今東西の昔話にふれる機会に恵まれると、幡多の昔話と同じような話が、幾千年の昔にも、世界のあちらこちらにも伝えられていたことを知りました。

幡多の伝承は実に多彩です。人口が十万人に満たない一地方に、実に六百話もの昔話が伝えられています。

その中には、人類最古の伝承ともいわれる洪水伝説(西土佐)をはじめ、古事記にまでさかのぼることのできる、いざなぎみいざなぎ伝説(宿毛)、ヨーロッパのかかわりを思わせる金の斧の話(佐賀)、日本を代表するとんちもの泰作さんの話(中村)、大力の女おかねの話(土佐清水)、それから、ほかに類話が知られていない、世界的にもめずらしい昔話があります。

ところが現在、親や祖父母から受け継ぎ、語ってきた方々の多くは亡くなられ、これらの貴重な昔話をきくことは、ほとんどできなくなっています。



中脇 初枝

神奈川県横浜市(中村出身)
昭和49年生まれ

昨年の暮れ、『幡多のむかし話』の編纂をされた当時の先生方が中心となって、幡多地方の民話と風土を紹介する『四万十川流れて 幡多昔むかし』という本が出版されました。泰作さんや大力おかねの話をはじめ、さまざまな昔話が幡多弁で語られ、また、昔の人々の暮らしぶりや、四万十川流域に自生する植物も紹介されています。ぜひ、たくさんの方々に手にとっていただいて、今、幡多に生きるこどもたちに、幡多弁で伝えてやってほしいと思います。

昔話は幾千年の時をこえ、空間をこえ、伝えられてきたものです。人間の短い一生では持ち続けることのできないことを、集団の記憶として後世に伝えてくれる、記憶装置でもあります。

そして、幡多の昔話は、幾世代にも渡って幡多弁で語り継がれ、磨きこまれていきます。幡多弁でなくては伝わりにくいので、あたしも幡多弁で語っていますが、幡多弁のわからない都会のこどもたちでさえ、目をきらきらさせてきいてくれます。幡多のこどもたちにこそ、いつも話している幡多弁で、幡多の昔話をきいてもらいたいと思います。

どうか、千年の昔にも、世界にもつながる幡多の昔話が、幡多のこどもたちに受け継がれていきますように。

作家。昨年、『童話』あかいくま(講談社)、高知県の昔話『ちんころりん』(福音館書店)を出版。